召喚術士の失敗

えあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
召喚術士の失敗

【Ｎコード】
Ｎ５７４９Ｓ

【作者名】
ええあ

【あらすじ】
怪しげな暗がりの中、黒ずくめの一人の女が悲願たる魔術、『精霊召喚術』に挑む。それこそが、今まで追従してきた世間と決別し、彼女の野望を実現する為の第一歩となる……筈だったのだが？　性格に微妙に難のある魔術士と性格に微妙に難のある精霊の、恋愛が芽生えそうで芽生えなそうで芽生えそうな異世界ファンタジー。概ね１ページずつで話は完結する短編連作タイプです。

召喚術士の失敗

「うふふぅ……うふふふふ……」

窓ひとつ無い密室の薄暗がりの中、知識のない者には奇怪な文様の連なりとしか見えない魔方陣と煌々と焚かれる四つの篝火を前にして、頭から足の先まで真っ黒いフードとローブに身を包んだ女が色々と含みまくった笑い声を上げている。

……うん、傍から見たらすっげえ怖い光景かもしんない。

そんな自覚はあるものの、その女――まあ何を隠そうこの私自身な訳だが――にとって、そんな人様の目などというものは果てしなくどうでもいいものではあった。そもそもこの場には私以外の人間などいない、というかいては困るし、今まさに成就せんとしているのは私の長年の悲願であり人生最大の希望。それがようやく叶う段を迎えつつあるとなれば、人間、含み笑いの一つも漏らしたくなるというものだ。

私は私の未来を私の望むままにするべく、長い時間をかけて綿密に準備してきた。と言ってもその期間はおおよそ一年半、大型魔術の準備期間としてはそうそう長い方でもなく長年と表現するのはいささかオーバーかもしれないが、私の十六年の人生分の一年半と言えば割合にしておおよそ一割弱、人生の十パーセント程度をかけたとなればそれはそれで一大事業と言えるだろう。……あ。嘘。ちょっと嘘つきました。その期間もこの魔術とは別に正規の研究も進めてたりしたわけで別に一年半どっぷりこれにかかりきりになってたわけではありませんでした。つまり片手間にコツコツ一年半？　あれおかしいいきなりちょっと大掛かりな日曜大工レベルになった気が。今のなし。色々犠牲にして超頑張ったのは間違いないんだからこの期に及んで盛り上がりに水差してはなんか凹む。ほらほらそうそう、これに時間をかけたいが為に研究室でしれっと尻を触ってきやがったセクハラ先輩研究員を社会的に抹殺する手間を惜しんで、

私的な手段で生物学的に半抹殺する程度で許してやったりもしたし。うわあ譲ってはならない一線を譲ってまで自分の野望の為に心血を注いできた私ってすごくない？

というわけで今この時こそがすごい私のすごい魔術がすごい局面を迎えようとしているすごい瞬間であるのだ。よしオッケー。

何か無理矢理モチベーションを維持しようという涙ぐましい努力を自らに感じないでもないがそれは置いといて、何はともあれ私が今行わんとしているこの魔術は、教授どもにバレれば絶対に間違いなく両腕をわしっと羽交い絞めにされて無理矢理中止させられるほどの厄介な代物であることには違いなかった。――この、精霊召喚術は。

精霊とは世界の構成要素である、地水火風の四元素を統べる超次元の存在である。精霊は元素であり、力であり、世界そのものであり……まあ精霊学の講釈をぶつ気は無いが、ともあれそういう生き物でありながらエネルギーであるみたいな存在である。で、道を究めた魔術士は、人間とは異なる体系の魔力を持つ彼らを召喚し、使役するのが常だった。魔術研究の協力者としたり、身の回りの細々とした用事を言いつけたりするのに実に都合のいい存在であるからだ。人間の助手を雇うとしたら給料を払わなければならないが、精霊の場合給料は要らない。召喚状態を持続する、即ち精霊が人間界に留まる為の魔力を提供しているだけでいい。というとなんだか奴隷扱いチックだが、基本精霊との契約は精霊の意思次第なので一概にそうでもない。

一旦結んだ精霊との契約を解消することは出来ないわけではないのだが、それは契約を結ぶ方以上に色々面倒らしいので――教授の一人はそれはあたかも結婚と離婚のようだと表現していた――、最初の精霊を一生使役するつもりで、魔力も知識も充実する年齢になってから、己が制御できる範囲で最上級の力量を持つ精霊と契約するのが通例であった。強い精霊を喚べばそれだけ維持にかかる負担も増えるが、それ以上に高位精霊の力は強力なので差し引きで言う

と精霊が強ければ強いほどプラスになる。私はその平均年齢からするとまだ少々若いが、魔力も知識も十二分に一人前なので問題ない。……あっ。これは別に勝手に自惚れている訳ではなく、誰もが認める事実だぞ。何しろ私はこの年齢にしてこの最高峰の魔術研究機関、アカデミーの研究員であるのだから。アカデミーに上がる程の魔術士ならば普通ほぼ全員がとっくに精霊を使役しているが、最年少研究員である私は年齢の若さから一度も精霊を持ったことがなかった。とはいえ周囲もそろそろ精霊を得てもいい頃合だと思ったようで、去年あたりから教授が早く四属性精霊召喚術を行えとうるさくなってきた所である。

精霊の属性についてもざっと説明しておこう。精霊は通常前述の四つの属性のいずれかを持ち、それぞれ火の精霊とか水の精霊とか言ったりするが、精霊の力が強ければ異なる複数の属性を備えることもあり、それを二属性精霊、三属性精霊、四属性精霊と呼ぶ。特に三属性以上になると必然的に対立する属性を併せ持つことになるわけで、それ以下の精霊と比べて段違いの力量を持つことになり、当然そうなると召喚者にも同様に段違いの力量が要求されるので……まあ後は分かるな？　三属性精霊の召喚に成功したその瞬間にその魔術士はいかなる出自であろうとも華々しい出世を約束されたと言っても過言ではなくなるのだ。いわんや数十年に一度現れるかどうかの魔力量が要求される四属性精霊使いとなれば、魔術兵団の総帥だろうと、王家直属の預言者だろうと、国教ファビュラス教の大神官だろうと、いかなる地位も望むままとなるだろう。教授たちにしてみれば、アカデミーの箔付けの為にも、その稀有な素質の持ち主たる私には是が非でも四属性精霊を喚び出してもらわなければならないのだ。

だがしかし。

その思惑には巨大な障害が立ちはだかっていることを彼らは知らない。

障害とは当のこの私自身。肝心の私が、実は四属性精霊の召喚な

どさらさらやる気がなかったのである。
　こんな事を知られては、拷問或いは泣き落としに近い勢いで説得される事が目に見えているので誰にも言ったことはないが、はっきり言わせてもらえばそんな未来図は冗談ではないの一言に尽きる。政治だの権力だのというくだらない俗事に煩わされるような人生など、私は真っ平ごめんである。
　私の願いはただひとつ、生涯この静かなアカデミーに篭って心行くまで研究に没頭することのみであった。心優しい水属性の女性型の中級精霊あたりと契約して、かいがいしく研究の手伝いをしてもらいながら魔術の解析や開発を死ぬまでやりつくす。出来れば教授にもならず生涯一研究員で過ごしたいくらいだがまあそれは流石に世間が許さないだろう。教授の地位を得れば自分の研究室を持って研究員を顎で使えるようになるし、それはそれで便利だからそこまでは許すつもりでいる。
　……ああ何という心躍る夢だろうか！
　その為にもこの私のささやかな野望が露見し四属性精霊召喚術を強要される前にさっさと私好みの精霊との契約を完了させねばならない――ということで、話は今私が成就させんとしているこの魔術。水属性精霊召喚術の隠密裏の実行と相成るのである。ふはははは、王侯貴族や聖職者どもへの自慢の種にしようと目論んでいた私がしれっと単属性精霊を連れて歩く姿を見た教授どもの唖然愕然とした顔が目に浮かぶ。楽しみだ！　実に楽しみだ！
　……と、そんな瞬間的な愉悦を味わいたいという動機もありまくりではあるが、本音は紛れもなく前者である。要職につくことを求められるだけならそれをその都度蹴ってしまえばいいのだが延々うるさく言われ続けるのも面倒だし、何より問題なのは四属性精霊程に魔力負担の大きい精霊を持ってしまえば研究の邪魔になりかねないことである。先程高位精霊を喚んだ方がプラスだとは言ったが、生憎と私の研究テーマは精霊に分け与えるそれそのもの、「人間本来の魔力」についてなので、私の場合に限っては強い精霊を持つこ

とはマイナス以外の何にもならないのだ。
――さて――
私は目の前の魔術に思考を戻した。期待にはち切れんばかりに高鳴る胸を平静に保とうと努める。とはいえ既に完璧に組みあがっている術式の上に流れる力は多少私のテンションがアレでも整然と駆け巡り、魔力圧を徐々に高まらせていく。
時は来た。逸る心を抑えつつ徐に腕を挙げ、魔方陣に対して両の手のひらを翳した。黒ローブが篝火の炎に赤く染まる。
私は万感の思いを込め、厳かに、長い儀式を完成させる最後の呪文を唱えた。
「我が求めに応じて来たれ！　我が精霊よ！」
その途端――正面の篝火から峻烈な水柱が立ち上がった。天を貫かんという勢いの水流は、しかし高い天井すれすれでぎゅんとカーブして魔方陣の中央へ瀑布さながらに落ちてゆく。そして続いて奥の篝火からも地獄の業火と思わんばかりの火柱が、右手、左手から旋風と火山岩のような岩石が上が……って、おおう！？
ごがががが！！！
轟音と共に、陣の四方からいろんな物が降り注ぐ。
思いの外激しいアクションにびっくりして思わず塞いでしまった瞼を、私はそろそろと開けた。
数秒前とは打って変わって荒れた様子もなくしんと平静を取り戻している（水や岩石は魔力が実体化したもの、つまり幻であるので魔術が終われば消滅する）魔方陣の中央には、複雑な、プリズムのような光がたゆたっていた。
ごくりと唾を飲み込んでじっと凝視すると、徐々に薄れ行く光の中央に、一人の男が立っているのが見えた。
絹糸のような長い髪は、この世に有り得ざるほどの輝きを持った銀。すべらかな真珠の如き肌は、研究室に篭りっぱなしの私にも負けないくらいの白。礼服のような優雅で気品ある衣装に身を包んだ、若くて……なにやらやたらカッコいい顔をした男。いや私は見目に

関する条件指定は魔術に入れてないぞ念の為。
しかしそんな際立った容姿よりも特徴的なのが、部屋の空気が水の重さになったかのような圧倒的な重量感……。これは、この精霊が醸し出す存在の気配だ。
精霊は涼やかな仕草で私に恭しく跪いた。
「良くぞ私をお喚び立て下さいました、我が主。私は精霊マキシ、属性は地水火風。貴女様の御名は何と？」
「あ、えと、……ミカエラ」
そういや私は名をミカエラと言う。よろしく。いやどうでもいいですね。
「清冽なる御力に相応しく何とも麗しき名。我が主、偉大なる魔術士ミカエラ様、貴女様に永遠の忠誠を」
場合によっては召喚に成功しても精霊にごねられて契約に至らない場合もあるというが、この精霊は即座に私を認めてくれたようだ。まあ精霊がごねるのは術者の力量が微妙ってことだから、それがないのは想定通りだ……が。
今こいつなんつった？
麗しき名とか照れるではないか……っていや社交辞令はどうでもいい。大切なのはその前、こいつの名乗りの方だ。精霊マキシ、属性は地水火風――四属性。
よ……
「四属性精霊ですと……！？」
「はい。求めに応じ馳せ参じました四属性精霊に御座います、我が主」
「いやいやいやいや！？　私四属性喚んでないし！？」
「……は？」
私の素っ頓狂な声に精霊は、人の物とは思えない程に整った顔をきょとんとさせた。いや人じゃないんだけど。丸くした瞳をぱちくりと瞬かせてから、精霊の青年は優雅に立ち上がり、周囲の魔方陣をゆっくりと見回した。

同じ魔方陣を描いても召喚する精霊にはある程度のランダム要素は絡んでくる。一口に精霊と言ってもみんな別人であるのだからそれ自体は当然なのだが、人間以上に精霊は種族ごとの特性がはっきりと違う為傾向はかなり厳密に限定されるわけで、水を喚ぼうとして四属性が出てくるとかそういうことが起こる事は普通ありえない。そして将来を嘱望される俊英たる私が魔方陣を組み間違えるなどという事はそれ以上にありえない……はずなのだが……？

想像の及ばない事態に唖然とする私の前で、周囲に広がる気が遠くなるほどに精密でかつ巨大な魔方陣の各部分を仔細に眺めてから銀髪の精霊は、ふむ、と鼻息のような音を漏らした。

「ああ、水を召喚しようとしてたのですか。水をメインに地、火、風の残り三属性で術式を構成しているのは、万が一水の召喚に失敗した際の術崩壊防止でしょうか。見た所、水の術式も完璧なようですから余程のことがない限り無用となろうというのに、余程慎重な性格とお見受けします。かつ、補助術式にここまで力を割く事が出来る素晴らしい魔力の持ち主。……しかしそれが想定外の結果になる原因でしたね。恐らく、ご自分で考えておられたよりもご自身の魔力が充実していたのでしょう。補助のつもりの術式が、十分単体召喚に耐え得るほどの出力を発してしまった。これでは少し水寄りなだけの四属性精霊召喚術式ですよ」

な、なんてこったい。己の力量を見誤るというのは魔術士にとって恥ずべき話だが、よもやこの私がそんなへまをやらかすだなんて。……そういえば今年の健康診断、研究が忙しくてすっぽかしてたんだっけか。去年の基礎魔力量測定の結果から見積もりを出してたがそれが間違いだったのか……？

愕然とする私の耳を、精霊の声が素通りしていく。

「これ程の魔力をお持ちならば、このあたりなどあと二つは上位の術式に置き換える事が可能なはずなのに……ん？　いや、ここからの繋がりからするとわざとランクを落としているのか。これは……ほほう、見事な調整です。精霊を唸らせるような術式を描く人間は

そうはおりませんよ、我が主」
　ええい我が主我が主連呼するなない。
「貴女様が本気で陣を書かれていたら、最高精霊たる僕のお祖母様をも召喚することが可能だったやもしれません。人の身でお祖母様を喚ぶなど七百年振りの快挙ですよ。しかし、僕にとっては何たる僥倖か、それだけの素質を持つ召喚術士に僕が喚び出される運びとなった。大丈夫です、僕は年若いゆえ魔力も発展途上ですが、いずれは大精霊になれる精霊です。いやあお買い得でしたね」
　人のことは言えないがこいつも中々謙遜というものを知らない。が、それが過剰な自意識ではないことは私は今身をもって理解していた。精霊が人の世界に顕在化する為には、召喚者の魔力をそのエネルギーとして消費することは既に述べたが……発展途上と自称する今ですら相当こいつ燃費がパネェ。これじゃあ殆ど自分の力を食われる状態になる！
「ちょ、無理。だめ。返却。チェンジ。お帰りはあちらです」
「貴女様の魔力なら僕を維持することは問題なく可能なはずですが？　どうやら貴女様の方もまだ魔力が成長する余地があるように見えますし」
「維持は出来るだろうけどこんな負担でかい精霊いらねーです、邪魔！」
「邪魔ですって……？」
　少々気分を害したように眉を顰めたのを見て悪い事を言ったとは思ったが邪魔なものは邪魔だ。プンプン怒ってさっさとお帰りください！
　――しかし精霊は眉間に皺を寄せたまま、器用に唇だけに笑みを乗せてきた。二つの表情が合わさって、物凄く意地悪そうな笑顔になる。
「冗談じゃありません。ご存じないのですか、我が主。人間にとって高位精霊の召喚がステータスであるのと同様、精霊にとっても強力な魔術士を契約者に持つことはステータスなのですよ？　貴女と

僕が対になればこの国最高の魔術士と精霊として王国の頂点に君臨し、あらゆる富も！　権力も！　歴史すらをも！　何もかもを掌握し意のままとするのも夢ではありません！……だというのにそれを拒否しようとは馬鹿ですか貴女！」

なっ……なんじゃそりゃあ！？

肉を持たぬ精霊界の住人の言とはとても思えない俗物的な発言をぐぐっと拳を握って叫ばれて、私は絶句する以外の反応を示すことが出来なかった。せ、精霊って、もっとこう無私無欲な超次元的な存在なんではないの！？　現世の富とか関係あるの！？

「そ、そーゆーの私全然興味ないんで！　私は静かに好きな研究さえ出来ればそれでいいの！　ってか精霊の癖になんでそんな野望の塊なんだお前！？」

こちらも負けじと喉の限りに叫ぶが精霊はこっちを真っ直ぐに見つつも知ったこっちゃねー様子で歓喜を全身で表していた。

「くっくっく、離すもんですかこんな逸材を！　僕の栄光ある未来の為に！」

こ、こらー！　精霊が召喚者を差し置いて何言ってるんだー！

私の栄光ある未来を返せええええ！！

窓ひとつ無い密室の薄暗がりの中、知識のない者には奇怪な文様の連なりとしか見えない魔方陣と煌々と焚かれる四つの篝火に囲まれて、精霊のいたく満足そうな含み笑いがいつまでもいつまでも響き渡っていた。

召喚術士の屈辱

膝に乗せた分厚い魔術書を、口を真一文字に結んで黙々と読んでいる私を、その横から四属性精霊がにこにこと上機嫌そうに眺めている。

それは一見研究に勤しむ主を見守る優しげな精霊の笑顔だが、そのいかにも裏表のなさそうな善人じみた笑みが、私には人を小馬鹿にし嘲り笑う顔に見えるというのは被害妄想だろうか。――否。断じて否。だって私が今、っていうかここ数日読み続けているのは精霊との契約解除法、こいつをどうにかして精霊の世界に追い返す魔術についてなのだから。

こいつの笑顔の横っ面に雄弁に書いてあるのは、やれるならやってみろ。その一言に他ならない。

ちょっとした手違いで召喚してしまったこの精霊、四属性精霊マキシと召喚術士たる私、ミカエラとの間で繰り広げられている静かな勝負の形勢は、今の所実に屈辱的な事に、概ね双方の顔つきが現している通りとなっていた。せめてもの意地で顔を顰めるのを何とか堪えて、私は横目で見た精霊から手元に視線を戻し、もう何度も繰り返し読んだ文章を諦め悪く目で撫ぜる。

契約解除は離婚みたいなものとはよく言ったもので、確かに調べてみるとかなり面倒臭そうなことが分かった。対象の精霊の同意を得られるか、同格かそれ以上の精霊との契約に乗り換えるか、魔術士の死亡もしくは後天的な障害によって魔術物理的に維持が不可能な状態になるか、最終手段として力ずくで追い返すか。

同意を得られないから困っているのだし、別の同等以上の精霊との契約なぞ何の解決にもなっておらず、死亡や障害とか論外。そして力ずくでの強制送還には数段以上精霊の力を上回っていなければならないが正直マキシは強すぎて、アカデミーきっての俊英たる私でもちょっと無理。私はまだ直接この精霊に魔力の行使を命じてい

ないので、現状は言わば『仮契約』で、『本契約』時よりは契約を切り易い状態にあるはずなのだがそれでも無理なのである。くっそ……なんであんなに制限掛け捲った魔方陣でこんなに強力な精霊が出てくることになるんだ？　認めたくはないが、間違いは見積もりに使った基礎魔力量だけじゃ済まない気がする。何か根本的に術式自体に誤りがなかったら、流石にここまでの論理矛盾は発生しないと思う。私のプライドか何かが邪魔をして無意識のうちに制限を外す術式でも書いてしまっていたのだろうか。今更だが、今後の為にもきちんと術式を見直しておくべきかもしれない。ああ、あの膨大な術式を精査せにゃならんとは気が滅入る……

苛立ちの代償行動としてがしがしと頭を掻いた私の前に、唐突にふんわりとした白い湯気が漂った。目の前のテーブルにコトンと置かれたのは甘くて優しい香りのする液体がなみなみと満たされた愛用のマグカップ。中身は、考え事をしている時には有り難い、たっぷりと砂糖の入ったホットミルクだ。

「勉強なさるのは良いことですが、余り根を詰められませんように。まだ体調も万全ではないのですから」

気遣わしげな顔をされて、私はちょっとした罪悪感を覚える。

実はつい先日、先程の三番目の手段の亜種として、一時的に自分の術力を削いでみるのはどうだろうとしばらく絶食するという方法を試してみてしまったのだ。飢えに苛まれながらも耐えに耐えたが四日目についにぶっ倒れ、気がついたらマキシに介抱されていた。

「そこまで僕が嫌ですか、我が主……」

捨てられた子犬のような目で言われてうっとなった私はそれ以上その策を続けることは出来なかった。

しょうがないんだ、私は小動物だけには弱い……。本当ならば必修であるはずの動物実験もなんやかんやと理由をつけて回避してきたくらいだ。多分このいい根性をした精霊のことだから、私の視界から外れた瞬間ニヤリとほくそ笑んでいるだろうことは想像に難くないのだが、怯んでしまった時点でその場は私の負けだった。

私にカップを届けたマキシは続いて洗濯物が入ったかごを持ち、寮のベランダに出ててきぱきとそれを干し始めた。私は思わず、はぁと溜息をついてしまう。

なんということかこの四属性精霊ときたら、長身美形で銀糸の長髪というデーハー（死語）な容姿に似合わず掃除も炊事も洗濯も、家事全般に於いてプロフェッショナルの実力を持っていたのだった。私が悉く苦手とするそれらを手早くそつなく完璧にこなす姿は最早神々しいとすら言える。

顔形は別に気にはしないが見栄えがいいのは悪いことではないし、性格も、権力欲にギラギラしてはいるが基本的には穏やかだ。私へのご機嫌取りの意味合いもあるのかもしれないが、今の所は私が望んでいた通り、どころか期待以上によく気を回し、まるで執事のように甲斐甲斐しく仕えてくれている。いや執事なんているご家庭に育ったことないからイメージだけれども。

内心は何を考えているのだかちょっと恐ろしい部分もあるが、少なくとも表層に現れている部分だけならば悔しいけど完璧に近い奴である。あーあ。これで力の弱い精霊でさえあったなら何も言うことないんだけどなー……

私が四属性精霊を召喚したという噂は、アカデミー中に瞬く間に広がった。

マキシは召喚された精霊としてはごく一般的な通りに常に主たる私の後に忠犬よろしく付き従うようになったので、それを目にした知り合いへの説明は避けられなかったのだが、こいつの気配はとても一、二属性程度の精霊のものでないのは一目瞭然で素性を隠し通すのは無理と判断し、私は投げやりに四属性精霊と明言した。つまりいずれ皆の知る所になるであろうことは最初から覚悟の上だったのだが……そのいずれがやってくる速さが尋常ではなかった。一時

間も経つと廊下を歩けば教授やら助手やら研究員やらが次々わらわら湧き始めるようになっていて自分の迂闊さを心底呪う羽目になった。何なのあんたら暇なの。研究室の位置的に絶対普通に出歩いてただけじゃ出くわさない奴らまで混じっていたから明らかに見物目的である。あの勢いなら遅くとも夕方には、全教授の耳に入っていたに違いない。

あれからもう一週間が経ち遠巻きに眺める見物人こそ減ったものの、これまでこっちがする挨拶に横柄に頷くだけだった顔見知り程度の教授たちが何かにつけ積極的に話しかけてくるようになっていた。

「流石ミス・ネルヴァ。君なら出来ると思ってはいたが、本当に四属性精霊の召喚に成功するとは」

うるせー成功言うな失敗だ失敗人生最大の失敗。そういや私は姓をネルヴァと言う。ミカエラ・ネルヴァですよろしく。……もうほんとにどうでもいいですね。

「そういえば先日のレポートも素晴らしい出来だったな。四属性精霊召喚士たる君にとっては、赤子の手をひねるような課題だったであろうが」

寝ずに頑張ったよ、あたかも努力してないかのように言うな。ってかあのレポート召喚術関係ねー。

「ネルヴァ君。君はこのアカデミーの誇りだ。君の薬品学の師たる私も鼻が高いぞ」

アンタに教わったのは講義時間の埋め草で半期だけだがな！

――勿論合間に挟まっている心の声は実際に発したものではない。私が返す言葉は機械的な、

「……ハイ。アリガトウゴザイマス」

それだけだった。あーいや、「君のこれからのキャリアを考えれば人脈の構築は決して損にはならないと思うんだがねえ」とご親切にも誘われたどこぞの貴族主催のパーティーへの返事だけは違う事を言ったな。

「イエ。私はまだ将来を思い描ける程に研鑽を積んでいない若輩者デスノデ」
パーティーとか引きこもりの私にはまじ勘弁である。しかもどこかの学会主催とかならまだしも貴族のパーティーって何事だ。元々は下町暮らしの平民出身でしかない私を晒し上げ辱める気か貴様。
……そんな風に自分の都合で断ったりとかもするが、私は概ね上の人間には従順な組織人であった。上と私の思い描く幸福な未来が異なるものである以上、いつかは決別しなくてはならないが、その瞬間までは己のプライドを小枝の如くへし折りストレスをごみ山の如く貯め込もうとも従順でいる事が、私が最後に笑う為の最も効率的な道筋だと信じている。本来の予定では今回の召喚術こそが記念すべき決別の機会であったはずなのだが見事に失敗した以上、まだ暫くは大人しい子羊に甘んじていなければならない……とは分かっているのだが……
ああもうなんかどうでもよくなった。出会い頭に有無を言わさず教授どもの後退デコをペンペンしてえ。こんなことになるんだったらいっそのことマキシのお祖母様とやらを喚び出して、最強の力を得て世界征服に乗り出してやればよかったかも知れん。世界を征服しちゃえばあとはもう研究とかし放題じゃん？　あ、ダメかそんな精霊持ったら自分の魔力なんて研究に使えるほど残るわけがないマキシでさえ無理なのに。本末が転倒し過ぎて最早何がなんだか。私は諦めてない、まだ諦めてないんだぞー己を見失うな頑張れ私。もう何言ってるんだか自分でも分からんわ。はははは。
「頬が糸をつけて天井から引っ張られているかの如く引き攣っていますよ我が主」
私の後ろにぴたりと付き従って行く先行く先で一緒に愛想を振りまいていたマキシが、人の目が途切れた途端にそう耳打ちしてきた。
「引き攣りもするわい」
渋面に限りなく近い笑顔であった顔をきちんと渋面に作り直して私が呻くと、マキシが私の前にすすっと回ってきて、そっと私の頬

に手を触れた。な、何だ？
「己より力劣る者に心にもない事を口にして媚び諂う屈辱はさぞお辛いことでしょう。ああ、お可哀想に。ですがこの状況から脱するのは貴女様にとっては至極簡単です。僕のお導きする将来にただ一言うんと言い、あと暫くだけご辛抱頂ければ、いずれ誰の顔色を伺う必要もなくなり誰もが向こうから勝手にひれ伏してくる幸せな未来がやってきますよ」
しあわせ……
「ってさりげなく人を洗脳しようとするなよお前は！？」
頬の手をぺしっと払い落として睨みつける。混乱の内にある私の頭はほんの一瞬ものの見事に揺らいでしまったがそれって私的ドツボの将来像じゃないか！　詐欺師かお前は！　そもそもといえばお前が元凶なんじゃないか、油断も隙もない！
「ははは、洗脳だなんて。僕の心を占めるのは、我が主、貴女様の幸福ただそれのみで御座いますのに」
「嘘こけ！？　お前の心を占領してるのは自分の栄光の未来だろ！
この耳でこれ以上なくはっきり聞いたぞ！？」
しゃあしゃあと言う腹黒精霊にそう怒鳴ると、不意に、彼の顔から茶化すような気配が消えた。
「……それが、我が主の幸せにも直結すると思っているのも決して嘘ではないのですがね。研究職が悪いとは申しませんが、よりにもよってその対象に人間の魔力をお選びになるとは……。僭越ながら魔なる法を識る者として進言させて頂きますが、人の魔力ではどれだけ画期的な術式を開発した所で、召喚術を用いた場合の効率より勝ることは有り得ません。根本的に人と精霊では魔力の絶対量が違いますし、行使自体、召喚術以上に術者の適性が必要となります。研究しても技術としては、例えば精霊が滅ぶなど、この世に於ける魔術的な大前提が覆る程の異変がない限り、とても実用化には繋がり得ない……どれだけ努力なさっても、日の目を見ることすらないかもしれないのです。それでも本当に宜しいのですか？」

「……っ」
これもこいつの手管であろう事は分かってる。だけどそんな口車とはとても見えない程に、本当に気遣わしげな表情と声で言われて、私は言葉に詰まった。
私は金も地位も最小限以上は要らないし政治的な栄誉も不要だが、魔術研究の分野においての栄誉なら話は別だ。研究者として自分の研究が世に認められる喜びは何物にも代え難い。それこそが、研究者の本懐だとすら言える。だがマキシの言う通り、私の研究内容で名声を得ることはまず起こり得ないだろう。現存の技術を超えられない新技術など誰にも見向きはされないのだ。そんなことは言われるまでもなく、それを続けている私自身が一番よく分かっている。
論理的に反論することなど出来ず、困った挙句私に出来たのは、そっぽを向いて、ぼそぼそと呟くだけだった。
「そんなことは分かってる。それでも私はやりたいんだからしょうがないだろう」
自分でもなんというか最早、理に適わぬ子供の駄々の様に思う。だが研究者としての栄光を天秤にかけてでも――たかが一言の指摘でぐらつく程の際どい選択ながらも、それは私にとって魅力のある題材なのだ。
と――
やがて諦めたように、マキシがふっと笑った。
「我が主はとても頑固な方のようですね。ここ暫くお仕えして既に思い知っておりましたけど」
優しく囁かれた声と透徹した微笑みに、私は思わずはっとして精霊の目を見上げた。
「精霊の世界に帰ってくれるの？」
「そんな嬉しげにそういう事を言われると少し傷つきますね」
嬉しげというか私に負けず劣らず頑固そうなこいつがとちょっと意外だっただけなのだが、わざわざ訂正するのも変なので否定しないでいると、透き通っていた笑顔が前にも見た事がある意地悪そう

な笑みに変わった。
「残念ながら、帰る気はさらさらありませんよ我が主。僕も、貴女様に劣らず頑固なのです」
あ、やっぱそうですか。……まあその方がこいつらしいよな。
寧ろ納得して力の抜けた肩を落とした私に、マキシは整った顔を近づけてそっと囁いてくる。
「召喚に掛かる魔力負担を軽くする方法ならありますよ」
人を誘惑する悪魔のような抗い難い魅力のある声に、私はがばっと顔を上げた。マキシの長い睫が異常に近い位置にあって一瞬怯んだがそれ所じゃない。
「そんなことが出来るの！？」
ぶっちゃけこの私ですらそんな魔術は聞いたことがないが、精霊は魔術にかけて人間などよりも余程博識だ。私が知らないことだって当然知っているだろう。
ええ、と頷いてマキシは目を細めた。
「術者と精霊の精神共振率が高ければ高いほど、魔力負担は減ると言われていますね」
「きょ、共振率ってのはどうやったら高められるものなの？」
ごくりと喉を鳴らし頭突きせんばかりに身を乗り出して尋ねると四属性精霊は意味ありげににこりとする。いや……にこりというか、にまり、と表現する方が適切か……？
「まあ、共振率とはざっくり言う所の心の繋がりという奴ですから。信頼とか友情とかその辺を地道に育てていけば。最良なのは、手っ取り早く恋仲になることですね。愛情は中でも強力な結びつきです」
ごっ。
……。
「どうしました我が主、急に柱に頭を打ち付けて」
「ちょっと首から頭が転がり落ちそうだっただけ」
「落とさずに済んで良う御座いました」
動揺の欠片もない平然とした口調でとぼけた事を言うアホ精霊は

無視して、私は柱から頭を引き剥がすようにして首の位置を戻した。手っ取り早く恋仲って……。

どうやら私はからかわれたらしい。……まあ、精霊が主人に対しまるっきりの嘘を言うことは通常ないから、理屈としては本当のことなんだろうが……。くっそう、何と悪辣な精霊なんだ。精霊に遊ばれるなんて魔術士として屈辱極まりない！

「我が主は、精霊などとは恋仲になれぬと、そうお思いですか？」

独り言を呟くような声でそんな問いを投げかけられて、まだこの上尚おちょくる気かと私は頭を押さえながら半眼を向けた。が、存外にもこちらに向けられていた視線にはからかいの色はなく、寧ろ思いがけない程の真剣さを宿していて、私はいぶかしみながらも首を捻る。

そんな事などついぞ考えたこともなかった。精霊は人間とは全く異なる生き物ではあるが、見た目は人と近いし、何の問題もなく意思の疎通だって出来る相手であるのだから、人によってはそういう感情を持つことも考えられないことではないのかもしれないが……精霊どころか人間相手にだってそんな感情をただの一度も抱いたことのない私にとってはそれは考える糸口すら見つからない疑問だ。

答えに窮して何も言えずにいると、マキシが瞳から力を抜いた。

「困らせましたかね。忘れて下さい」

今度こそ声に笑みを戻して、マキシは立ち止まっていた私の背を軽く押した。――ああ、そうだ。こんな廊下で突っ立っている場合じゃない。まだ提出しなければならない書類とか色々あったんだっけ。

性悪四属性精霊のよく分からない冗談は頭から追い出して、私は再度、歩き出した。

召喚術士の契約

「ちょおおおおお！？　断ったはずじゃんかあああああ！？」
甲高い女の絶叫が寮の自室にこだまする――と他人事っぽく言っては見ても例によって女というのは私自身な訳だが、それはさておき誰がどう聞いても悲痛な、としか思わないであろう私の絶叫が、我ながらとても女の子の部屋とは思えない手狭で雑多な空間の隅々まで響き渡った。私は根をつめて勉強なりをした後に眠りに落ちると一昼夜は起きない程に爆睡して、友人に「あ、また泥がベッドの中に落ちてる」とか言われているらしいたちだが、今のはそんな時の私ですらも思わず飛び起きてしまうほどの音量だったと思う。当然の事だがすぐそばのテーブルで場違いなほど優雅に朝の紅茶を入れていた見目麗しい青年、精霊マキシの耳にもその声は届き、彼は紅茶を注ぎ終えるや否やすぐさま私の方を振り向いた。……途中では止めないんだな。
「いかがなされましたか、我が主？」
「おまっ、ちょっ、こ、こら、どっ、どうしてくれるんだお前！」
割と冷静に情景及び心理描写を行っていたように見えたかもしれないが私は決して落ち着いてなどいなかった。そう簡単に落ち着けるものではない。それだけの衝撃を今現在の私は受けている。
「僕はとりあえず今の所何もしておりません故、特に思い当たる点が多分ないのですが」
回らぬ口で言葉になってない怒りをぶつけられるも精霊は穏やかな表情を一切崩さずに私の前に紅茶を置いた。とりあえずとか今の所とか多分とかが微妙に不穏だが、今回の件については間接的にはこいつの所為ではあろうが直接的には違うのはその通りなので聞かなかったことにしておく。私は震える手で、私を絶叫せしめたその元凶――先程部屋に届けられた手紙をマキシに渡した。渡してから精霊って魔術文字は当然分かるだろうが普通の人語も読めるんだろ

うかと思ったが心配は無用のようで、マキシの切れ長の瞳がさらさらと文字を目で追っていくうちに、唇の端が愉快そうに……ちょっと意地悪そうに上がっていった。うっ、しまった。こいつに見せるべきではない内容だったかも。
「ほほう？　パーティーのお誘いですか。差出人は先日の教授殿ですか？　結構なことではないですか、是非お招きに預かるべきです」
一読し終えて言った言葉は案の定、私の意に反するものだった。
そう、それは先日誘われた貴族のパーティーとやらへの、再度の招待状……否、出頭令状だった。
「冗談じゃない！　絶対にお断りだ！」
その手紙の差出人たる教授に口頭で誘われた時に言ってやりたかった言葉を吐きつけると四属性精霊は片方の眉を上げる。
「何故です。人脈構築は必ずや貴女様の為になりますよ」
「奴と同じこと言いやがって！　そういうのはいらんと言ってるだろう！」
「研究者を志すにせよ、あって困るものではありません」
んなこたあ分かってる。分かってるが、
「私が困るわ！　き、貴族のパーティーだぞ！？　魔術士って言っても平民の私が行ける所じゃないだろう！」
「確かに人間の貴族には同じ人間の平民に何故か偏見を持っている者もいると聞きますが、主催者は、その教授殿と懇意にされている方なのでしょう、大切な客人を悪いようには扱いませんよ。それに仮に出席者にそういう者がいたとしても相手にする必要はありません。いずれ数多の権力を掌中に掴まれる貴女様を蔑ろにする愚か者など捨て置けば良いのです」
「だから！　権力掴まないし！」
またさりげなく誘導しようとしてくるマキシに突っ込むが奴はけろりと「その話は後ほどゆっくりすると致しまして」と流した。ゆっくりもこっくりもしないぞ断じて絶対に！
「何故です？　別に対人恐怖症と言う訳でもありませんでしょう」

改めて尋ねられた瞬間。私の目がぎくっとあさっての方に泳いで行ったのをマキシは見逃さなかった。
が、それは心底意外な事実だったようで、信じられないとばかりに目を見開く。
「……講堂の壇上ではあれほど堂々と振舞われます貴女様が？」
うぐぅ。私の顔は自然と苦虫を噛み潰した形になった。
……ああそうだとも。私は人付き合いが得意じゃない。自分の研究分野について大勢の前で発表したり討論したりするのは別に問題ないのだが、知らない相手との他愛もない会話ってのは本当に苦手だ。同じ魔術研究者相手ならまだ話題があるからどうにか間を持たすことも出来るだろうが、私は魔術以外は何も知らない。よりにもよって貴族なんぞが相手となったら共通の話題をひとつ見つけるだけで三年くらい掛かりそうだ。
仮に話下手な部分がなくたって、下町訛りで見た目も地味で礼儀も教養もあったもんじゃない私がそんな華やかな席に出るなど考えるだけで恐ろしいことである。血統書つきの猫の品評会に何故か紛れ込んだ薄ら汚れた野良猫だ。そんな晒し者になど、誰が好き好んでなりたいというのか。
ぷいとそっぽを向く私にマキシは苦笑したようだが、渡した手紙を丁寧に畳んで私に返しつつ、落ち着いた口調でゆっくりと言う。
「しかし、こう繰り返しての要請があった以上は、我が主、貴女様のスタンスでは断りにくいのではないでしょうか？」
うぐぅ。さっきと全く同じ、声にならない音が再度喉から漏れる。
確かに、一旦断った件について再度、しかも書面で申し入れられるとなったらこれは誘いと言うよりも一種の業務上の命令だ。上の命令には逆らわない、これが私がここまで貫いてきた成功の為の大原則である。勿論教授たちの意向に最後まで従って王都や教会のお偉いさんになる将来なんて真っ平だからいつかは断固としてノーを突きつけなくてはならない瞬間が出てくるわけだが、果たして今がその決定的な反逆のタイミングなのだろうか……？

――冷静に考えてみて、答えは、否。
はあぁぁぁ。さっきから変な音で吐き出しつつあった腹の中の空気の、残りを全部吐き出す盛大な溜息をついた私を、四属性精霊はやっぱりにこにことして見ているだけだった。

ドレスなんぞという生活にも研究にも不必要な代物を私が持っている筈もなく、人づてに心当たりを聞きまくってもらってぎりぎり当日午前中に先輩の女性から借りることが出来た。魔術士の制服である漆黒のローブでいいじゃんずるずるした感じなんて似たようなもんだしって思うのだが、男の魔術士はローブで構わないようなのだが女の場合ローブは正装として扱われないそうなのだ。訳が分からない。

生まれて初めて着たドレスはえらく窮屈だったが友達の手、厳密には友達の使役する女性精霊の手を借りて何とか身に着けた。幸いにして、その精霊は昔の主の時に何度かドレスの着付けをしたことがあったのだそうだ。助かった。手伝ってくれた友達はしきりにいいなあと言っていたが、代われるもんならいくらでも代わってやりたいものである。薄い青色の、フリルの沢山付いたドレスは見る分には確かに大変可愛らしくて良いかもしれないが、それだけにこの私が着るのだけは勘弁させてもらいたかった。似合わないことこの上ない。土下座で許されるなら迷わず土下座してるレベルだ。せめてもう少し、大人っぽいものがいいというか後生だからフリルはやめてくれまいかとも思ったが、選択肢はなかったしよく考えたら大人っぽいドレスは恐らく体型的に輪をかけて似合わない。私の体形は一言で言ってしまればがりがりの寸胴なのであった。

着付けが終わって部屋から出ると、ドアの脇で待っていたマキシが私を一目見るなり、「お綺麗です」と言って微笑んだ。
「ドレスはな」
「貴女様ご自身も十分にお綺麗ですよ？」
「……こんなみすぼらしい体形の女のどこが綺麗だってんだ」

見え見えのお世辞を言われたって全く嬉しくない。鼻に皺を寄せるとマキシはとんでもないと大仰に首を振って見せた。
「何を仰いますか。乙女の儚さと清楚さの現れた気品あるお姿です。貴女様を目にして護って差し上げたいと思わずにいられる男などきっといないことでしょう」
お、乙女……清楚……。聞いたこともない言葉を聞いたような気がして私は断固として否定要素を探さなくてはならない気になった。
「髪だって色は暗いしくねくねしててみっともないのにか？」
「貴女様のブルネットの髪には魔術士としての知性が現れておりますし、白皙のお肌にも大変よくお似合いです。理知的でありながらも柔らかな髪質は愛らしいお顔立ちに相応しいまろやかさを添え、一段とその美しさを引き立てております」
……うわぁ。
「よくもまあそうもすらすらと背筋の痒くなる嘘を並べ立てられるもんだな。吟遊詩人として食っていけるぞ」
私が勝てる相手じゃねーや。そう判断して白旗を振るとマキシは意外そうに眉を上げた。
「おや、精霊は主に嘘はつけないものなのですよ？」
「主の不利益になる嘘はだろ。言った方が不利益になるなら言える」
「我が主は疑り深くていらっしゃる」
くすくすと可笑しそうに笑ってから、マキシは「お手を」と手を差し出してきた。教授には奥さんがいてそちらも出席するので、私のパートナーはマキシになる。精霊が異性なら、精霊をエスコートする若しくは精霊にエスコートされるというのは別に珍しいことではないらしい。魔術士にとって精霊は自分の能力を最も万人に分かりやすく誇示できるポイントの一つだし、精霊は美形が多くて映えるしな。私の場合は特に精霊とセットで披露するのが教授の目的なんだからこれで当然なのだろう。私としても教授とマンツーよりかはマキシの方が気疲れしないで済んでずっと有難い。しかしだからと言って何もアカデミーにいるうちからエスコートすることもない

だろうと思ったが、履き慣れないヒールの高い靴はたったの数歩で私を辟易させたので、素直にその手を取った。
　アカデミーの学舎から外に出ると、空模様は生憎の雨だった。学舎の玄関ポーチには一応屋根は出ていて横付けされた馬車に風雨に晒されずに乗る事が出来るようになっているが、地面は濡れてはいるので衣服の裾がちょっと怖い。ドレスが汚れやしないかとびくびくしながら裾を抱えて歩こうとすると、横合いからにゅっと伸びた手が私の身体を掻っ攫い、軽々と持ち上げた。
「おおう！？」
「失礼。折角のお召し物を汚してはいけませんので」
　――こ、これは伝説のお姫様抱っこって奴ですか！？
　あまりに想定外な出来事にあわあわしている間にマキシはポーチを歩ききり、馬車の中に直接私を降ろした。マキシはごく当然の事をしたまでと言わんばかりの、至って何事もなかったかのような表情だが、私は呼吸の仕方も忘れる程にびっくりした。あと歩行距離が十歩程も長かったら心臓が止まっていたかも分からん。ど、どういう感覚してるんだろう精霊って……。精霊にとってはこれってごく普通の行為なんだろうか。それとも私がいちいち驚き過ぎなだけなんだろうか。精霊の常識も人間の常識も、私にとってはよく分からない。既に車中に乗っていた教授とその奥さんなら分かる事なのかもしれないが、そんな事を尋ねる勇気はなかった。もしも私の感じた通りに非常にこっ恥ずかしいことだったらと思うと怖くて表情を伺うことすらできない。
　私に続いてマキシも馬車に乗り込もうとしたが、その直前にふと外を振り仰いでぽつりと呟いた。
「風の機嫌がすこぶる悪いですね。もっと天気が崩れるかもしれません。今のうちに散らしておきますか？」
　何気ない口調で問いかけられて、そんなことが出来るのならと安直に頷きかけたがその直前ではっと気づいて首を止めた。
「ここで頷いたらお前に魔力を振るわせるって事になって即ち『本

契約』って寸法なんだろ？」
「おや、よく気付かれましたね。残念」
「この極悪詐欺師！」
ぶんと振るった私の拳は軽く顔を引いた精霊の顎を掠めもせずに空振りした。ほんっとに油断も隙もない。

教授夫妻と私たちを乗せた箱馬車は、雨の中街へと向けて出発した。風も雨脚も強かったので外にいる御者がちょっと可哀想だなあと思ったが教授の精霊である御者は風と水の二属性だから大丈夫だと教授が言った。……イヤ水属性って言ったって別に水棲生物って訳じゃあるまいし、大丈夫とかそういうアレじゃないような気がするんだが。すまない逆らえない。

山の中にあるアカデミーから一番近い街に入って、夜の闇にも煌びやかな市街を暫く走ると一層煌びやかな邸宅が見えた。その玄関ポーチに馬車が止められ、降ろされたその場で思わず私は口をぽかんと開けて周囲を見やった。お城だ。そう思った。目に入るのはポーチだけだから建物の全容は分からないが、扉も柱もアカデミーのそっけない作りとは訳が違う。きっとあの重厚な扉を開いたらぎらぎらとしたシャンデリアが掛かっていて、真っ赤な絨毯なんかがびらーっと敷いてあるに違いない。まだ見てもいない光景を想像したら頭がぐらぐらしてきて視界が暗くなってきた。いやだ。絶対に場違いだ私。馬車に散々揺られて気持ち悪いしコルセットもきつくて気持ち悪いしこの上人に酔ったら多分吐く。どうしよう。無理だ。
「大丈夫です、我が主」
平衡感覚を失いかけていた私の肩を支えて、耳元で囁かれた声に、私は思わず顔を上げていた。大丈夫ですか、ではなく、大丈夫です、という一言。
「僕がいますから、大丈夫です。たとえどのような事態が起ころうとも貴女様は必ず僕が護ります。だから、大丈夫です」
決して強くはない、あくまでも優しく穏やかな声が私を覚醒させ

る熱を帯びて耳から身体の隅々まで行き渡っていく。気が付けば、視界を覆おうとしていた闇は消えて、私は自分の足でちゃんと立つことが出来るようになっていた。

「大仰な奴だな。ここは未開の密林か」

こちらを見つめる瞳にそう唇を尖らせると、マキシは満足そうに微笑んだ。

扉の先は想像通りに絢爛豪華でやっぱり気後れしたが、マキシが差し出した腕に手を置いて廊下を歩いていった。豪勢な額に入った絵画や精細な模様が描かれたとんでもなく高そうな壷が並ぶ異空間にくらくらしつつも、どうにかパーティー会場となっているホールの入り口まで辿り着く。そこは更にこの世の物とは思えぬ世界だった。宝石の山のように煌めくシャンデリアが吊るされ、目も眩まんばかりの明るさに満たされた広い室内には、見るからに偉そうな紳士や花畑かって思う程色とりどりに着飾っている貴婦人たちがごっちゃりとひしめいていた。私なんぞが足を踏み入れたら即刻首根っこを掴まれてそのまま牢屋にぶち込まれたって文句は言えなそうな光景を一望して、更に震えが来る程の躊躇を感じたが、マキシの急かすでもなくただ私を待っている視線を感じて、えいと気合を入れて足を踏み出した。いっそのこと目を閉じてしまいたいがそうも行かない。人で溢れ返るホールはマキシに誘導されていても歩きにくいことこの上なかった。その上、丈の長い衣服はローブで慣れているが、やっぱり靴が足を引っ張る。

「転びそうになったらどうぞ遠慮なく僕にしがみついて下さい」

そのさまを想像するとこっ恥ずかしいことこの上ないが、転ぶよりはマシであろうと考えて素直に従う事にした。廊下ではまだよかったのだがホールに入ってからは私の緊張度合いも極限まで高まってしまったようで、教授たちに付き従って奥の人の集まりに辿りつくまでに二回ほどつっかえてしまったが、いきなり体重を掛けてもマキシはびくともしなかったのでコケかけたのはそんなには目立たずに済んだと思う。

そんな風にここに至るまで、口から心臓が飛び出るんじゃないかって程の緊張に晒されまくってきたわけだったが、最大の懸念事項であった、貴族を初めとする知らない人たちへの挨拶については、思いの外大した事ではなくって拍子抜けしてしまう程だった。私が何もしなくても勝手に紹介して勝手に自慢してくれる教授の後ろにくっついて歩いて普段みたいに、

「ハイ。アリガトウゴザイマス」

って言っていればいいだけだったのだ。なんだよもー。これでいいんじゃないかハハハ。心配して損したー。

……だなんて思えるのは多分、マキシに半ば抱えられながら歩き続けていたからだ、というのは本当の事を言えば身に染みるって位に気づいていたが、私はさもなんでもないような振りをし続けていた。だってみっともないことこの上ないじゃないか。誰かに引っ付いていられるっていう安心感に縋っているなんてどこの子供だって感じだ。

実際、マキシは宣言通りに私を護ってくれた。時折、「ハイアリガトウゴザイマス」というおまじないさえ返せない話しかけ方をしてくる奴らがいたもんだから。言うに事欠いて、

「魔術士だそうですが、可憐でお美しいお嬢様でびっくりしました」

だなどと……！　いや、浅学な私だって貴族というものは社交辞令を言う生き物だということくらいなら知っている、知っているがだからと言ってそれに一体何と答えればいいのだ。ハイアリガトウゴザイマスってそれじゃ肯定だろう、それは駄目だろう常識的に考えて。

だがそのように私が一瞬でも困ると、横からすかさずマキシが「我が主は大変内気な方で御座いまして」などと会話を持って行ってくれる。すると大体は「奥ゆかしく慎ましやかな素晴らしい女性だ」という賞賛に変わるのだった。社交辞令すげえ。

挨拶してくる人が途切れた時に、私は後学の為にマキシに尋ねてみた。

「あれは本当はどう答えればいいの？」
「有難う御座いますで良いですよ」
「えっ、何それずうずうしい」
「別にずうずうしくもないと思いますけど……」
社交辞令というのは本当によく分からない。魔術の呪文の方がよっぽど平易だと思う。

パーティー会場にはダンスフロアもあったがそっちは恐ろしくて全く近寄らず、軽食が供されているテーブルには食指が動いたが如何せんぎゅうぎゅうに締め上げられたコルセットが窮屈でたいして腹に入らずと、なんかもう、うあああってしか言いようのない生殺し感を味わっていたその時に、事件は起きた。
折からの雨はいつの間にか嵐に変わりつつあったようだったが、大気を騒がしていた水と風の元素たちがついに反乱を起こしたらしかった。
唐突に鳴り響いた、積み上げた丸太の山を突き崩すような物凄い轟音が、会場の全ての人間の会話を、一瞬にして纏めて全部奪い去った。しん、と一斉に静まり返った数秒間の空白の後、ざわざわと不安そうな声が戻る。
「落雷でしょうか」
呟いたマキシと一緒に窓の方を見るが、窓は頑丈な雨戸で閉じられていて外の様子は見えない。窓を開けたらまずいよなあと思いつつ、そちらの方へ近づいていこうとすると、急に腕を掴まれて私はたたらを踏んだ。あぶねっ。
あわやコケそうな目にあって抗議の声を上げようと見上げた四属性精霊は、今度は顔を窓の方ではなく、反対側の廊下の方へと向けていた。
「まずいですね、火事のようです」
「えっ、えええ！？　火事！？」
潜められた声は周囲に無用な混乱を招かずにおく為だったのだろ

うが私が騒いでしまった所為で台無しになった。しまった、と気づくがもう遅い。その時には廊下の天井を這うように、ゆっくりと黒い煙がホールに侵入してきていた。
場の群集が、蜂の巣をつついたような大パニックとなった。
「ご、ごめん」
「いえ、あの様子では我が主の所為という訳では」
黒煙に追い立てられるようにして出口に向かうドアに殺到する客たちに押しつぶされないように、マキシが私を庇う感じで壁際に寄せた。人の流れに乗って避難しようとしなかったのは、うっかり押し倒されて転んでしまえばその方が命が危うい、そんな状況だったからだろう。第一私は魔術士だ。例えマキシが私を避難させようとしたとしてもそれは拒否しなければならない立場だ。一般人にはない特殊な魔力を持つ私たち魔術士は職種的には研究者とはいえ、非常時は率先してしんがりを務めて一般人の安全の確保に努めるものなのだ。
……って。教授ちゃっかり混じって逃げてるし。あのハゲ。
怒涛の如く流れていく人だかりの中に見えた薄らハゲを見送ってから、私は目の前のマキシに目をやった。私の横に両手を付いて囲ってくれてるおかげで私は人々の体当たりを直接受けずに済んでるが、マキシは少々痛そうに目を瞑ったりもしている。精霊と言っても、腕力や身体の強さは人間と変わらないし痛覚だってある。
「大丈夫か？」
「いえ、こんなものは大した事ではありません。それよりも、問題なのは奥の様子ですが……」
あらかた人が流れきった所で、マキシは再度奥の方へ視線をやった。ホール内には靴やら扇子やら勲章やらの落し物が大量に落ちてはいるが、転んで踏み潰されたような怪我人などは幸いにも出なかったようだった。しかし、奥は分からない。時間が経つにつれ、奥へと続く廊下から流れてくる煙は濃くなっているように思える。
「厨房の方なんじゃないか？　使用人の人とかがいるかもしれない」

「では、僕が見てきますから我が主は避難を」
「私も行く」
私は邪魔な靴を脱ぎ捨てて、隠しポケットからハンカチを取り出す。身軽になって走り出そうとした所を、慌てて止められた。
「まっ、待って下さい、いけません！　貴女様は外へ」
「何でさ？」
「何でさって、そんな本気で分かってないような顔をされて言われても……」
本気で分かんねーよ。この緊急事態に悠長に何やら文句を言っているマキシを置いて、廊下に飛び出した私は、皆が逃げたのと反対側に向かって走り出した。

火の元は厨房ではなく、ホールから出てちょっと行った先の廊下だった。やっぱり落雷だったんだろう、炎を上げる大木が倒れこんできて大きな窓を突き破り、廊下を塞いで周囲の絵画やカーテンに火の粉を撒き散らしている。激しい風雨もまた同じ窓から吹き込んでいるが、火の元素の勢いを衰えさせるには全く至らないようだった。
どうもこの先は突き当たりのようだし、規模としてはまだ屋敷全体に広がる程ではないようだから誰もいなければこのまま引き返すつもりだった。だが悪い事に、その奥に人影が見えた。視界は分厚い黒煙で覆われているが人が床に這いつくばっているっぽい姿がちらちら見え、ばちばちと木が爆ぜる音に混じりながら微かに「たすけてええ」という声が聞こえる。ああくそう、人の事は言えないが何かどんくさそうなのが取り残されてるな！
「おい、そっち！　そっちには出口はないのか！？」
怒鳴り声でそう問い掛けると、泣きそうな声で「ありませんん」と返って来る。そりゃそうだろうな、ないから困ってるんだろう。
ちっと舌打ちして、私はドレスの腕をまくった。ぎょっとした様子で、私を追ってついてきたマキシがこちらを見る。だが別に、こ

の細っこい腕で燃え盛る大木を抱えてどかして助けにいこうって訳じゃない。そんなこと考えるまでもなく無理だし、無駄に火達磨になるのも御免である。

私は両腕を真っ直ぐ前に伸ばし、手指を大きく開いて手のひらを炎に向けた。もう既に私の両の目は対象物しか見ていないからよくは分からないが、マキシは更に動揺したように身じろいだようだ。精霊にとっては、素手で炎に挑もうとするよりも尚、人間が自ら魔術を用いてそれを行おうとしているという方が驚きに値する事のようだ。

私はおもむろに呪文を唱え始めた。

「風の元素、疾く来たりて空に舞う。人の世界を吹き抜けるはローレリア、銀色の鍵。大いなる魔。巨人の息吹。全てを吹き散らし消滅させうる偉大なる力。レウラ、レウラ、ゾルティーグ、レイス、レ、ウィールレリヒト。小さきもの。輝けるその葉脈の御名。我が持ちたるささやかなりし力を持ちて開く次なるマグナールの扉、吹き散らせ、吹き散らせ、我が求めに従いて」

古今東西のありとあらゆる魔術言語を解析し、人間のみの力で使える魔術として一から組み立てる、というのがとどのつまり私の研究の内容だ。呪文がぶつ切れだったり部分部分あまり意味が通っていなかったり意味を解析しきっていない未知の単語が含まれているのはまだまだ最適な呪文を研究中で、今はつなぎとして使える暫定的な呪語で無理矢理術式を繋いでいるような状態だからである。

未完成ながらも術力を帯びた呪文に私の魔力が励起される。強いエネルギーを与えられたそれは出口を求めて私の身体を駆け巡り、炎に向けて翳される私の腕に唐突に気づいたかのように、奔流となって一気に手のひらに集まった。

そして――

そよっ。

――鼻息くらい微かな風が、私の手から出た。

「我が主……？」

「うわあああん！！　できたんだもん！　あんた喚ぶ前だったら多少の風くらいなら起こせたんだもん！」
癇癪を起こした子供のように叫ぶ。あの大木を吹き飛ばす、なんて物凄いもんじゃないが、炎をちょっとは吹き散らせるかも、くらいの魔術には本来なっていたはずなのに！　こんなに自分の力が使えなくなってるなんてどんだけ燃費悪いんだよこの四属性精霊はー！
「人間の身で物理現象を引き起こせる程の魔術を使えることは賞賛に値しますが、それでも流石に万全であっても、これ程の勢いの炎を消すには至らないでしょう……というか風じゃ危ないですし」
溜息のような声で呟いてから、マキシは本物の溜息も吐いた。
「炎にも水にも風にも地にも干渉できる僕ならこの場を収めるのは造作もないことですが、主としてお命じになりますか？」
マキシは馬車で冗談でしてきたのと意味としては同じになる伺いを私に立ててきた。精霊の召喚者として精霊を使役して――『本契約』をするかどうかという伺いを。奴にとってはそれこそが本望な事のはずだが甚だ不本意そうな声なのはやはり緊急事態にかこつける形になるのは流石に気が咎めるからなのだろう。だが私にだって、心底不本意極まりないことだが、最早方法がないことくらい分かっている。と言うよりも、これまで諦め悪く本契約せずにはいたが正直な事を言えば、こいつを送り返すのは無理なんじゃないかなーと、ここ暫くの調べで思いつつはあったのだ。もう今更である。
当たり前だ、早くしろ――そう口に出すより先に、マキシは早口で続けていた。
「以前貴女様が読まれていた魔術書、あの記述には不足がありました。精霊を送還する方法はあの他にもあるのです。それは『仮契約』のまま五年を過ぎる事。今のまましばし我慢されれば、ミカエラ様、貴女様は僕から解放され、お望みの研究を続けることが出来るようになります。それでもお命じになりますか？」
なんっ……！？
私は目を見開いてマキシを見た。召喚した精霊に命じて魔力を使

わせる事で初めて本契約となる、という事自体は知っていたが、そんな仮契約の期限なんてもんは知らなかった。精霊を仮契約のままにしておく魔術士自体が、通常はそうそういるもんではないからだ。
ここでマキシに命じなければ――目の前にいる知らない人を一人見捨てれば、私は自分の望む未来を手に入れられる――？
私はぎっと奥歯を噛んだ。
私の未来と知らない人の命どっちが大切だと思ってるんだ！
――――人の命の方に決まってんだろアホー！
実際に迷った時間は呼吸一回分にも至らなかった。いい加減、そう長々と迷っているわけにもいかない。
「ミカエラ・ネルヴァが精霊マキシに命じる、炎を鎮めろ！」
「お命じにならなければ幻滅して更に契約を切りやすくなったかもしれませんのに」
ほっとした声でそんな小憎たらしい事を言ってくるのが何とも言えず腹立たしい。
「流石にそんな寝覚めの悪いこと出来んわ」
腕を組み憮然と返答した私の隣から四属性精霊がふわりと浮かび上がった。高さのある廊下の真ん中へんくらいまで浮上して、燃え盛る炎を見据える。
銀色の髪が炎の色に染められて、まるで黄金のように神々しく輝く。パーティー会場のシャンデリアなど霞んで見える程に、畏怖すら感じるまでの壮麗な光。猛る火の元素を威圧するかのように手を差し伸べて、私の呪文よりもずっと威厳のある声で、命じる。
「炎よ静むべし。水よそれを助くべし。風よ止むべし。地よ護るべし。我は四属性精霊マキシ。全ての元素よ我が意思に沿え」
それは魔術言語で紡がれていたものの、呪文ですらない、端的な、小細工も何もない命令だった。私の力ずくでの呪文になど見向きもしなかった元素たちが、精霊の言葉には我先にという程に従順に従って命じられるままに流れていく。マキシの身体から発せられる、金とも銀ともつかないまばゆい光に包まれて、炎はその勢いを落と

し、窓から吹き込む雨の雫はそれを包み込み、風は水の動きを邪魔しないように静まり、熱に煽られぱらぱらと崩れかけていた石の壁はその崩落をぴたりと止める。
何もかもが圧倒的だった。人の限界を軽々と超えて行く。まざまざと自分との違いを見せ付けられる。
痛い程の悔しさにも切なさにも似た感情を覚えながらも、けれども私は素直に思っていた。
ああ、綺麗。

魔力の残滓たる粒状の光を纏って、精霊が私のそばに音もなく降り立った。
窓を突き破って黒く焼け焦げた大木が倒れ込んでいるという惨状には変わりないが、すっかりと炎は消えて、上がる煙ももうもうとした黒から僅かに白い湯気が揺らめくのみに変わっている。奥で逃げ遅れていた人も、腰でも抜けたのかそこから動けないようだが無事のようだ。マキシに救い出してきてもらってもいいが、恐らく鎮火されたのが確認されればすぐに誰かが助けに来るだろう。放っておいても大丈夫なら放っておいていい。
「我が主……」
恭しく膝をつき、どこか遠慮がちな視線でマキシが正式に主となった私を見上げる。それに視線を移した私の唇が勝手に動いた。
「……好き」
「えっ！？」
唐突にそんな事を言った所為か、酷く驚いた顔をするマキシに、堰を切ったように私は言葉を続ける。
「私は精霊が好きなんだ。もっとあんたたちに近づきたい。だからこそ、私は研究対象に人間の魔力を選んだ。精霊の本質たる魔力を研究して、精霊により近い存在になる為に」
いつもは思い出しすらしない、遠い遠い記憶の中にある声が聞こえる。

――悪魔の子！　あんたなんか私の子じゃないわ、寄らないで、汚らわしい――

――悪魔の子？　いいや、君は精霊の子だ。

――精霊の子？

――そう、精霊の子。そら、見るといい、彼女は私の精霊だ。美しいだろう？

――……きれい。

――だろう。君は、この綺麗な彼女らに愛された子だ。

人並み外れて魔力が強く、身体の内に収めきれぬ者を我々魔術士はそう呼ぶ。

魔なる法を知らぬ者にとってはそれは呪われた悪魔の力に見えただろう。しかし、その力は学べば押さえられるようになるものだ。そして自分の、皆の為に使える、祝福された力となるものだ。

――祝福された、ちから。

わたしも……そうなれる……？

――勿論だとも。美しき精霊のいとし子よ、我々と共に行こう。

――精霊の子――

「精霊の存在は私に生きる意味をくれた。私に誇りをくれた。だから私は……いや、私が。精霊に近づく為の研究をしなくちゃならなかったんだ」

けど……

柄にもなく滔々と語っていた自分にふと気が付き色々な意味で我に返って、私はぐったりと肩を落とした。

大元になった過去のトラウマ的何かは今となってはぶっちゃけどうでもいい。寧ろ魔術を学ぶ機会を得られた事を感謝しているくらいだ。重要なのは現在だ。たった今、私がこの道を自らの手でバッ

サリ断ち切ってしまったらしき現実だ。
　最初から無理だと思っていたならばまだ諦めもつこうものだったが、しかし実はその手段は存在していて、尚且つその唯一かもしれない手段を聞いたそばから私自ら摘んじゃった、というこの事実が何かもう時間が経つにつれてだんだんふつふつと腹の中で沸き立ってきた。ああああもうこの性悪精霊、お前物凄く言わなくていいこと言ったよ！　いっそ何にも知らないまんま本契約させるのが優しさだろうあの場面！
　この内心の恨みつらみを知ってか知らずか、目の前の精霊はいっそ朗らかとも言える、邪気のない笑顔を私に向けた。
「研究を続ける手段でしたらまだ残されておりますよ。前に、申し上げましたでしょう。精神共振率の話を。僕を送還することはもう無理ですが、精神共振率を高めますれば或いは、魔力に研究を続けられる程度の余剰を生むことができるやも知れません」
「まあ、これから一生共に過ごすんなら信頼し合える関係でいたいもんではあるね……」
　自分の将来が音を立てて崩れていくさまに凹みきっている私はマキシの慰めに力なく答える。その共振率とやらついては確かに以前聞いたが、よく考えてみればそんな単純な事で目に見える程の効果があるのならそれは人間の魔術士の間でもとうに有名になっている理論の筈だ。実質の効果の程はゼロではないが然程でもないって所なんだろう。
　しかしそれに対して四属性精霊は妙に晴れやかな声で答えてきた。
「大丈夫です。惚れましたから」
「……え？」
　そのいらえの意味が全く分からず、私は怪訝に思って眉根を寄せる。見上げると、マキシは天からの啓示でも受けたかのような、気味が悪いくらいに清々しい表情で私を見つめていた。
「割と最初のうちから優しく芯が強く素敵な方だと思っておりましたが今確信しました。貴女様は僕の力だけではなく心をも捧げられ

る方です。精霊としてのみでなく一人の男として惚れました。だから大丈夫です。共振率についてあまり信用されておられないようですが、恋人同士ともなれば本来よりワンランク上の精霊の維持も可能な程の効果を齎すと聞きます。それなりの余剰は十分に見込めるでしょう」

……。

……は！？

「いっ、いやそれで大丈夫ってことになるのがよくわかんないんだけど！？　こっ、恋人になるには自分がオッケーってだけでなく双方の同意ってもんが必要であってだな！？」

何が何やら状況がよく掴めていないまま、頭を経由しない反射として反駁を口にする。え、ええと……？　ええと……？　何だって？　非常に難解な魔術言語で語りかけられたかのようにすぐには意味が分からない。じ、辞書。辞書はどこ？

「そうですね、残念ながら現状、貴女様はまるっきり僕にご興味がないようですが……」

残念ながら、という部分だけ本当に残念そうに声を落としたが、続けて向けられた顔はいつもの意地悪そうな――いや。自信と確信に満ちた笑みだった。

「大丈夫ですよ。僕は絶対に貴女様を手に入れてみせますから」

――な、なんなの！？　何の自信なのそれは！？

っていうかいやちょっとその前に待ってまだ脳内翻訳がちゃんと出来てない、惚れるとか何とか……ええ？　あの、だ、だれがだれにですと？

「絶対に、離しませんからね。我が主」

一体自分の身に何が起こりつつあるのか杳として把握できないないまま、私はただただ唖然として、召喚したあの日に言っていた言葉と同じような事を言って笑う私の四属性精霊を見続けていた。

使役精霊の事情

先程から二人の妙齢の女性魔術士は、茶と茶菓子を置いたテーブルを挟んで向かい合い雑談に花を咲かせている。……尤も、花を咲かす、という表現がこの場合において果たして適切であるかどうかについては、僕自身少し自信を持てないでいるのだが。その会話の主題はまさに女性同士のお喋りの花形たる恋愛談義であるのだが、花を咲かすなどという可憐な表現を用いるには、その内容はいささか際どいものではあった。

「つまり怖いって訳？　大丈夫だろ、どんな精霊だって主人に害をなすことは絶対に出来ないんだから、襲われたりなんかしないって」

一頻り喋り終えた我が主に対し、何を馬鹿な事をとでも言わんばかりの呆れきった声と顔つきで、魔術士の女性はそう告げた。

「襲……！？」

顔を赤らめて絶句する我が主、ミカエラ様。口が何事かを紡ごうとぱくぱくと動いているが、声は出ないようだった。無理もない。我が主は恋愛などという話題には、お仕えしてまだ日の浅い僕ですらそうと分かる程に全く無免疫な方の筈なのに、そんな強烈な単語を突きつけられては絶句するより他はあろう筈がない。ご友人たるその女性がそれを知らないという事もないと思うのだが、我が主をからかうのが目的なのか、或いはそのような話題に大らかな女性なのか頓着した様子はない。

それはともかく、襲うだの襲わないだのと……槍玉に上がっている僕こそが誰よりも一番抗議を申し上げたい所ではあるのですが。僕が精霊の身で我が主たる魔術士ミカエラ様に恋慕し、そのお心を乞うているのは紛れもない事実ではありますが、我が崇敬する主にそんな無体な事などする訳がないではないですか。事を起こす際は襲うなどという卑劣極まりない真似はせずちゃんとご納得頂いてからじっくりとそれはもう丁寧に慎重に念入りに取り組ませて頂きま

すよ当然でしょう。と反論したい事は山ほどあるものの、残念ながら僕には口出しする事は出来ない。
「そ、そういう心配をしてるんじゃなくってだな。マキシは腹黒な奴だけど、酷い事はしないってのは分かってるし……。そうじゃなくって、なんというか……そんな事を言われたって、ど、どう対応していいか分からない……っていうか……」
腹黒はともかくそう言って下さるのは十分に光栄な事ながらも、僕の不服の度合いと比すると大分頼りない小声で我が主が抗弁されると、ご友人はソファーにふんぞり返って「ああん？」と柄悪く唇をひん曲げた。
「かー。うっぜーうっぜー。のろけなら他所でやれってんだ」
「何でこれがのろけになるんだよ！　真剣に悩んでるのに！」
ばんばんと両手でテーブルを叩いて憤慨を表現する我が主に、はんっ、と軽蔑するような息が吐きつけられる。勿論、本心からの軽蔑ではなく冗談交じりだ。……いや割と本心かもしれないが。
「のろけだろ。嫌なら止めろって一言言やあいいんだ。相手は自分の精霊なんだから、禁止されたら絶対にやってこない。それを禁止せずにどーしよどーしよ言ってる時点でのろけ以外のなんだっつーんだよハゲ」
「ハゲてない！」
「黙れ。ハゲろ小娘。大体だな、あんな精霊にしたって例外な位の美形に言い寄られる生意気な小娘の悩みなんぞを聞かされるこっちの身にもなってみろってんだ。私に砂でも吐かせたいのか、アサリか私は」
言った女性魔術士は、実際に口の中に砂でも溜まってきたかのような顔をしてテーブルに置いてあったティーカップを持ち上げ、中身を一気に飲み下した。空になったカップがソーサーの上に戻されると、すかさず横から給仕として控えていた水属性精霊が茶を注ぎ入れる。
「そもそも、魔術士が精霊に言い寄られるなんて話自体今迄聞いた

ことすらねーのによ。そんな超例外事項に何をどうアドバイスしろって言うんだ。……そういやないよな、ティア」
「……そうですね。私の聞く限りでは、耳にしたことはありません」
近くにいたからなんとなく、と言う調子で尋ねた声に、ティアと呼ばれた水属性精霊の女性は、控えめにそう返答した。ふむ、日和見的で無難な返答です。内心でそう褒めると声なき声で、それはどうも、といういらえがあった。
「そういうわけで私が相談に乗れるのは以上。私はアンタみたいな教授のお気に入りじゃないから期末のレポートで忙しいの。帰った帰った」
しっしっと犬を追い払うかのように手を振ってご友人が言うと我が主は唇を尖らせて反論する。
「レポート免除してもらってる風に言うな、人聞きの悪い。ちゃんと私も忙しいに決まってるだろ」

「やあ、ミカエラの四属性精霊じゃないか。こんな所に突っ立ってどうしたんだい？」
――不意に掛けられた声に、僕は意識を自分の身体に戻した。
視界に映る景色が、テーブルを挟んで語り合う二人の女性から、廊下の向こうからやってきつつある一人の魔術士の男性とその後ろに付き従う精霊に変化する。
「これはハスリム魔術士、我が主は只今ご友人のトロア魔術士とこちらのお部屋でご歓談中です。女性同士のお話がしたいとの事で、私はここに追い出されております次第です」
主の知己たる魔術士に手を胸に当て礼意を示しつつ、僕はそう返答した。尤も、追い出されたと言っても精霊は、やろうと思えば今そうしていたように他の精霊と五感全てを共有することが出来るので、中の会話は水属性の彼女を通じてしっかりと聞かせて頂いていたのですが。いえいえ勿論我が主の身辺をいついかなる時でもお見守りするのが僕の役目に他ならないからですよ。別に興味本位など

ではなく主にお仕えする精霊として当然の職務を遂行しているまでです。
　そのようなこちらの内心や事情に気がつかれたかどうかは定かではないが、ともあれハスリム魔術士はそれについては何も言及せず、はは、と声を立てて笑った。
「あのミカエラ・ネルヴァとマイナ・トロアが女性同士の話とは面白い冗談だ。あの教授うぜえクソうぜえとか言い合ってる姿がまざまざと目に浮かぶよ」
　今回は言っておられなかったが確かに仰りそうな台詞に、しかしながら僕は主の名誉の為に曖昧に微笑んで頭を垂れるに留めた。そうした魔術士本人への挨拶に続け、その使役する精霊にも礼儀として目礼すると、頭の後ろでだらしなく手を組んでいた青年姿の火属性精霊は片手を上げて応えてきた。
　その気安い様子にハスリム魔術士が気づく。
「君ら、顔見知り？」
「あー、まあ。昔馴染みです」
　答えたのは、先方の精霊の方だったが、僕も併せて頷きを返した。事実そのハスリム魔術士に従属する火属性の彼とは古くからの知り合いで、人間の言う所の幼馴染に近い。と言っても、精霊は人間世界にいる以上は、昔馴染みと旧交を深めるよりも主人に仕える職務の方を優先するものなので、こちらに来てから改めて何かしら話をした訳ではなかった。
「ご主人。ちょっとだけ時間貰ってもいいスか？」
　なので、火属性精霊がそう言った声に、僕は内心少々驚いた。
「うん？　積もる話でもあるのかな。どうぞどうぞ」
　が、彼の主たるハスリム魔術士は特に驚いたそぶりも見せずにあっさりと許可を出した。自由なものだ、と少し感心する。その火属性精霊に引っ張られ、僕はドアから離れさせられた。僕としては扉越しであっても可能な限り我が主のお傍についていたいのだが、彼がそうした理由に思い当たる点もないではないので大人しく従って

おく。
「お前、人間口説いてるって本当か？」
少し離れた所にやってくるや否や、彼は小声で単刀直入に、僕が思っていた通りの事を訊いて来た。先程水属性の彼女に僕がしていたように僕の五感に入り込めば、その場から離れる必要も小声になる必要もないのだが、単属性精霊の彼の力ではそれは少々骨の折れる作業なのだろう。
「本当ですよ」
彼に合わせて肉声で、僕はあっさりと肯定した。瞬間、彼の顔が何とも形容しがたい苦さに曇る。
「……正気か？」
「ええ。とても」
再度、一瞬の間も置かずに答えると、彼は眉を寄せたまま溜息を吐いた。
「我が主に余計な事は言わないで下さいね」
火属性精霊は明らかにまだ何かを言いたげな表情であったが何かを言わせるよりも先に、そう釘を刺してから主の傍に戻ろうと彼を躱すと、既に部屋の扉が開いていて我が主は廊下に出て来られていた。おっと、部屋をお出になられる主人のお迎えもしないとは、この僕とした事が不覚を取ってしまった。足早にお傍に戻ろうとする僕に、そこにいたハスリム魔術士と言葉を交わしていた我が主は気づいてこちらを振り向いた。
「じゃあ」
ハスリム魔術士に軽く別れの手を上げると、我が主はそのままこちらに歩いて来られたので僕は立ち止まって頭を下げその場でお待ちした。すぐ間近までやって来られた我が主の、普段の定位置である斜め後ろに付き従った僕に、我が主は振り向かないまま声をかけてきた。
「なあ、マキシ。今ハスリムに聞いたんだけど」
その声は部屋の中では聞かれなかった僅かな緊張を帯びていて、

僕は少し嫌な予感を覚える。
「精霊にとって人間と恋愛するのって禁忌だっていうのは本当なのか？」
……やれやれ。口止めした矢先に別口から漏れるとは思ってもいませんでした。

「お茶でも淹れましょうか」
「いらない。今たらふく飲んできた」
「それは残念。折角昨日、ご好物の青鹿屋の砂糖菓子を買って参りましたのに」
「……菓子だけちょっと出してくれ」
既に日常的となったそんなやり取りを経てから我が主は勉強机も兼ねる古びたソファーセットに着き、僕は少し遅れて砂糖菓子を乗せた盆を持ち主の元へ戻った。
砂糖菓子の皿を主の前に置いてから、主の邪魔にならぬよう普段通りに視界の外に下がろうとすると、やはり呼び止められた。斜め向かいのソファーに掛けるようにと言いつけられ、僕は嘆息を押し殺し、失礼します、とそれに従った。
「おかしいとは思ってたんだ。いや、今日言われて改めて思ったんだけど、精霊と付き合ってる魔術士なんて私も全然聞いたことなかったから」
言い出されたのは、先程の問いかけの続きだった。
「いくら種族が違うったって見た目だって変わらないし言葉だって通じる相手なのに、一組もそういうカップルが出来ないなんて逆に変だ」
「これまで皆無だったわけではありませんよ。例えば、北方の豪族に嫁いだという三属性の女性とか……」
僕は反論として指折り例を挙げようとしたがそこで止まらざるを得なかった。よく考えたら僕もその他には思い当たらないかもしれない。ごまかすように笑みを浮かべて見せてから手を降ろしたが、

主に深刻な表情を崩しては頂けなかった。
「何で禁忌なんだ？」
先程の問いを繰り返す主に、僕は精霊らしからぬ曖昧さで返す。
「そこはまぁ、種族の違いがありますれば、色々難しいこともあるのではないかと」
「何か明確な問題があるんじゃないのか？」
「……さあ、どうでしょうか」
「精霊の癖に主の命令をやり過ごそうとするたぁいい度胸じゃないか」
疑問であって命令じゃないですからねそれは。あまり褒められた事ではありませんが、制限上は嘘をつかないならこのようなごまかしも認められてはいるのです。人間世界に於ける精霊の振る舞いには様々な制約がありますが、同時に色々と逃げ道もあるものです。
が、賢明なる我が主はほんのまばたき二回分程の時間、僕を見つめただけでその逃げ道を封鎖する方法に思い至った。
「四属性精霊マキシに命じる。知ってる事は全部言え」
「……精霊の使い方を覚えましたね」
まあ、よほど迂闊か精霊を使い慣れていない魔術士にしか効果のないささやかなごまかしなのですけれども。僕は渋々と口を開いた。
「以前、精神共振率の話は申し上げましたが……心の繋がりなどというものが魔力効率に響く事からも分かる通り、精霊は心の在り様が直接己の魔力、ひいては己の生命にまで直結する生き物です。且つ、その意思は、非常に強固にして一途。精霊召喚術にて召喚されその使役精霊となれば、言わば口約束に過ぎない召喚術士との契約の履行に万難を排して固執し、ひとたび恋をすれば、千年を超える生涯を通してただ一人を愛し抜く程に」
真っ直ぐに、我が主――僕の愛するその方を見つめながら告げる僕に、果たして何を思ってくれたのか……こちらを見返しながらも僅かに所在なさげに瞳を揺らす主に小さく微笑んでから、僕は続ける。

「それ故に、時折、酷く脆い。愛する者を失えば、哀傷のあまり己の生命を保つ事も出来なくなってしまう者すらいる。……いえ、正直に申し上げれば、そうなってしまう者が殆どです」
　僕の言わんとしている事に気づいたのか、我が主は揺れつつあった瞳の焦点をはっと定め、僕の目を見た。
「共に長き時を生きる精霊同士の愛の結末であるのなら、またそれも運命と誰もが割り切ってはいるのですが、ご存知の通り、人間の寿命は我々精霊と比べて非常に短い。故に、人に恋するという事は、精霊にとって膨大に寿命を削る行為に他ならないと解釈され、禁忌とされているのです」
「そんな……」
　主の唇が言うべき事を捜すように戦慄き、どうにかして見つけ出した言葉を紡ぐ。
「そりゃあ……そんなの、駄目に決まってるじゃないか。タブー視されて当たり前だ。下手したら、寿命が十分の一とかそこいらに縮まるってことじゃないか。そんなの馬鹿げてるよ」
「何が馬鹿げていると言うのです。貴女様に恋をした事ですか」
「そ、そうとは言わないけど……」
　いっその事、そうだとでも言って切り捨ててしまえばいいものを。それが最善でないと分かっていても、冷たく突き放したりなど出来ないのが我が主の優しく、甘い所だ。それとも僕の事を憎からず思ってくれていると自惚れても良いのでしょうか？
　僕はソファーから立ち我が主の傍らに跪くと、膝の上で固く握られていた白い手を恭しく取ってその指先に口付けた。その途端、主のお顔にぼっと火がついたかのように一気に朱が差す。精霊は他者の外見の美醜については通常特に意識にも留めない――というか、人間の感じるような美醜の価値観自体を持っていないが、このようなお姿を見るとやはり可愛らしいと思ってしまう。
「今貴女様が考えている事を当てて差し上げましょうか。今のうちに、きっぱりと僕を振ってしまった方が僕の為になるんじゃないか。

そう思っていますね」
　触れ合う手がびくりと震えた。――素直な方だ。
「勿論、貴女様の心に既に別の方がいるのなら、お邪魔はしません。僕は貴女様を心の奥でのみお慕い申し上げて余生を過ごしましょう。けれど、僕の為だなどという理由では駄目です。何故ならもう既に僕は、貴女様を愛してしまっていますから。もう遅いのですよ」
　恐らく、これはとても卑怯な手段なのだろう。優しい優しい我が主の心根に付け込む、とても狡い罠。こんな事を言われたら、この心優しい方がそう簡単に僕の手を振り払えるわけがない。けれども僕は、どれほど汚い手段を用いても、この御方の心を手に入れる事を望んでいる。その為の武器となり得る、この御方の同情を買える精霊の体質すらもが幸運であると思える程に。
　しかし我が主は甘さと同時に愚直な程の頑なさも持ち合わせた方だった。
「そ、そんなの妄想とか、思い込みかもしれないじゃないか！　ちょ、ちょっといいなって思ったのを恋と勘違いするとか、よく聞く話だろう！？　大体、召喚してからまだ一ヶ月くらいしか経ってないのに……」
「人を愛するのに時間なんて関係ありませんよ。人間だって、時としてそうなのでしょう？　より直感の働く我ら精霊ならば尚更です」
　最初は――召喚されたあの時は、僕はこの方を、自分のキャリアの踏み台にする気満々だった。精霊世界に生を受けてから二百年、この方は僕が生まれて初めて持った召喚者だった。それは僕の生まれついての魔力の高さが原因で、僕を召喚し得る力量を持つ魔術士の絶対数自体が少な過ぎる現実をそのまま現していたのだが、そんな僕を初めて召喚して下さったのは僕以上の精霊すらをも喚べるほどの潜在能力を持つ魔術士で。魔法陣の中からお姿を見た瞬間に僕はこの方の溢れんばかりの可能性を感じ取り、惚れ込んでいた。この機を逃すわけには絶対に行かないと感じた。
　勿論、踏み台と言っても一方的に食い物にする気などは当然なく、

互いに良い思いが出来る様に最善を尽くすつもりであったのだが、その目論見はたちどころに崩れた。まさか、召喚者と利害が真っ向から対立するなどという出来事が起こるとは全く想定していなかった。

しかしだからと言って諦めるわけには行かない。この御方こそが僕の主たる方だという直感を信じ、僕はどうにかして気に入られようとひたすら媚び諂う作戦に出た。我が主は、僕のそれが単なる阿諛追従である事を見抜きつつも、傍にいる事自体は許して下さった。僕を送還する研究には余念がなかったものの、冷淡に振舞うことは決してしなかった。こちらの心が痛む程に優しい方だとは思ったが、僕も引くに引けなかった。そこには意地もあったが――実を言えば、我が主にはさぞご迷惑だったに違いないが、いかにしてこの鉄の意志をお持ちの方を落とすか考えるのが楽しかったのだ。

思えば、その時にはとうに僕は恋に落ちていたのかもしれない。一体どこが最初だったのか……僕と同じように、他者に媚びてでも自分の願望を通すことを是とするしたたかな強情さに、似たもの同士の親近感が芽生えたというのが始まりだったのか……それともやはり、初めてお目にかかったあの瞬間だったのか。言われてみれば、確かにほんの一月程度の出来事にしか過ぎないというのに最早僕にも分からないが、いつしか僕はこの方の、頑固さも一途さも真剣さも優しさも鈍感さすらも、何もかもが愛おしいと思うようになっていて……かの時、精霊により近い存在になりたいと、真っ直ぐに告白されたあの刹那に、最後の確信を得たのだ。見ず知らずの者にすら慈悲を垂れる優しさを持ちながら、僕の矮小な野望などとは比較にならない、種の壁すらも超える大望を抱くこの方こそが、僕の全てを捧げる主だと。

「愛しています。ミカエラ様」

ほっそりとした指先に唇を触れさせながら囁くと、我が主は泣きそうな程に眉を寄せて、何かを堪えるように目を閉じた。――その、これまでに見た事のなかった表情に、僕は声を低めて今ふと脳裏を

掠めた懸念を口にする。
「……それともやはり心に決めた方がいらっしゃるのですか？　まさかハスリム魔術士？」
「は！？　何であいつが出てくるの！？」
僕の問いかけに、我が主は今しがた閉じたばかりの目をぎょっと見開いて、心底仰天したような声を上げた。僕は薄く笑って告げる。
「彼ならばご心配は無用です。火の単属性風情を使う魔術士一人、僕の敵ではありません」
「何で臨戦態勢！？　っていうか私に好きな人がいたら邪魔しないってさっき言わなかったかお前！？」
言ったかもしれませんがそれは本当は貴女様に想い人がいないと思ったからこそ言えた訳で。実はいるのかなと思ったら何だかふつふつと敵愾心が湧いてきました。
が、主の反応から察するにやはりそれは思い過ごしなのだろうという結論に至った僕は冷静さを取り戻す。
「……まあそれは冗談ですが」
「本当に冗談だったかお前。目が割とマジだったぞ」
割合冷静な声での突っ込みに、僕は眉を寄せて我が主を見つめた。
「貴女様が紛らわしい態度をなさるものですから」
「私の所為かよ……」
「では、他にどなたかがいらっしゃるのでしょうか」
げんなりと呟く主に、僕は改めてその重要事項を問うた。と、我が主は先程のような追い詰められた表情こそ見せなかったものの、ばつが悪そうに視線を逸らす。
「そういうのは別にいないけどさ。……そうじゃなくて、お前さ、私の好きな人なんかを心配してる場面じゃないだろここは。自分の寿命を心配しろ」
「そう申されましても。都合三百年弱も生きれば人間の尺度で言えば稀に見る程の長寿命に当たると思うのですけど」
「稀にもいねーよ」

「では全然問題ないじゃないですか。長生きしましたためでたしめでたしで」
真顔でそう言うと、主は頭痛でも感じたかのように僕が取っている方ではない手で額を押さえた。
「強引に前提を摩り替えるなよ。お前は人間じゃなくて精霊なんだから全然長生きになってないだろ。……って言ってもどうせ平行線なんだろうな。どうせ、私の言いたい事を全部分かってて無理矢理摩り替えてるんだろうから」
「我が主のご慧眼には感服致します」
やはり真顔で賛辞を述べると、額を押さえる指の間からじろりと睨まれた。主はしばしそのまま酷く恨めしそうに僕を見て、はあと息を吐いて額から手を離す。ついでに僕が握っていた手もそっと引き抜いてしまう。
やれやれ、だから言いませんでしたのに……。
僕は床についていた膝を伸ばすと、主に無礼を働く決意を固めた。徐に立ち上がった僕を驚いた目で僕を見上げる我が主、ミカエラ様の瞳を見詰めたまま身を乗り出して、ソファーにその小さな身体を閉じ込めるようにして手を突く。
「ちょ……ちょっ！？　マ、マキシ！？　な、なに？　なにを」
ミカエラ様は僕から逃げるように背凭れに仰け反ったが、その分僕は接近する。我が主はより一層逃げ場を失っただけだった。慌てふためいて視線を彷徨わせるその頬に、僕はそっと手を触れた。
「つめた……」
小さく声を上げて、主が首を竦めた。ああ、いけない。つい興奮して体温が下がってしまったようだ。僕は四属性精霊だが水寄りな為、心を乱すと水属性の特徴が強く出て、体温を自分でも知らないうちに下げてしまう癖がある。しかしわざとではなかったが声を奪い取ってしまえたのは幸いと、頬に触れるのは指先のみに留めるようにしながら言葉を紡ぐ。
「ミカエラ様。貴女様は、愛するどなたかと家庭を持って、幸せに

暮らす夢を思い描いた事はありませんか？」
　穏やかな声で問うと、我が主はこわごわとながらもそっと目を開いた。この方は、どんな問い掛けにも真摯に答えようとして下さる。
「分からない……考えた事、ない。将来については、研究者として立つことしか考えたことなかったし……家庭っての自体も……私は親はいたけど、あんまりその、」
「……すみません」
　意図せず、余計な事を思い出させようとしてしまったことを謝罪して、僕はミカエラ様の髪を撫でた。再び目を閉じるが、今度は怯えたのではなく、くすぐったく感じたようだった。温度を取り戻しつつある指で、再度すべらかな頬を慈しむようになぞった。
「不躾な発言となりますことをお許し下さい。……僕は、そのような夢を持っています。精霊の家庭の概念は、恐らく人間世界のものとは相当違うと思うのですが、生涯の伴侶を得て、愛し合い、子孫を成すという点では変わりありません」
「し、子孫」
　頬を赤らめ繰り返してくる我が主を見ながら、僕は、ええ、と答えた。精霊だって生物ですから繁殖はします。
　僕としてはその部分が主題ではなかったのだが、我が主にはそれは十分に気に掛かる点であったようで、大分逡巡してから僅かに首を傾げ、窺うように僕を見た。
「そ、そういえば、精霊も、あのやっぱり、そ、そういうことするのか？」
「そういうこととは？」
　そ知らぬふりをして聞き返すと、ミカエラ様のお顔に一段と朱が差した。おや、もう既に十分赤いと思っていましたが、まだ赤くなる余地があったのですね。これも分かっていて聞き返してみただけなのだが、我が主は生真面目にも、人間と精霊の生物学上の違いよって僕が理解し得なかった可能性を考慮されたらしい。どうにかして説明しようと口を開いたり閉じたりの作業をしばしの間行った後

に結局言語化する事が出来ず、諦めて真っ赤なままで俯いた。
「なんでもない」
「精霊世界に在る精霊同士の繁殖方法については人間とは少々異なる形になりますが、精霊は、人間世界に在る時は、外見だけでなく内部構造までほぼ完全に人間の肉体を模しますので、そういうこともしようと思えば可能ですし、人間と繁殖する事もまた然りです」
「分かってんじゃねーかこの馬鹿」
皺の寄った我が主の眉間を僕は微笑みながら優しく撫でた。
「しかしながら子孫を成すというのは精霊にとっても無論幸福ではありますが、どちらかというと愛情の副次的な産物でして。家庭を持つ、と便宜上申し上げましたが……その言い方では、少し意味合いが違ったかもしれません。これは、人の言葉では何と申し上げればよいのか……つまる所、愛する方とひとつになることを強く望んでいるという意味なのですが」
「ひ、ひとつ」
主はまた僕の発言中の一単語を拾い出して絶句された。何か言い方が拙かっただろうか。もしかしたら慣用的に不適切な意味を有する表現だったのかもしれない。僕は人語は覚えて日が浅いわけではないのだが如何せんネイティブではないので微妙なニュアンスの誤りはどうかご容赦願いたい。……だったら紛らわしいから言葉尻でからかうな、と言われそうだが。
「いえこれは別に他意はなく。精霊にとって理想的な愛情の形です」
釈明するように前置きをして、僕は少し考えながらその様態を人語に表すことを試みる。
「つがいで魂も肉体も溶け合って、混じりあい、五感のみに留まらず、あまねく全ての想いを交感して、ひとつになる。言葉も、意識すらも必要としない、右手と左手のような別個でありながら完全に同一の存在になる。そのような状態に至れることを、我ら精霊は無上の幸福と感じます。精神と肉体、全と一の明確な境を持たない我らと違って人間には個という概念がありますから、ミカエラ様にそ

れを求めるわけではないのですが……」
　我が主は茫洋とした表情で僕の稚拙な説明をお聞きになられていて、僕もそれ以上この感覚をどう表現すればよいのか思いつかず――僕がミカエラ様に何を求めているのか、その最も肝心なことが僕自身の中ですら茫漠としていて言い表すことが出来ずに止む無く口を閉じると、ミカエラ様は唐突に、すっと手を伸ばして僕の眉間を撫でた。先程僕がミカエラ様にしたのと同じ仕草に、僕は目をしばたいて、そこで気づいた。僕の眉間にも同じような皺が寄っていたらしい。
　ああ、この小さな手の何と雄弁なことだろう。僕には幾万言を弄しても辿り着けない境地へと、この方は簡単に行き至る。お許し下さい、と胸中で謝って、僕はミカエラ様のお体を抱きしめた。ぎゃっ、と耳元で悲鳴が上げられてその身体が氷像のように固まったが、しばしそのままでいても、禁止の命令は下されなかった。
　有り丈の想いをこの腕に込める。
「優しく、気高き心を持つ我が主。決して同一の存在とはなれなくとも、僕は貴女様にもっと近づきたいのです。貴女様が精霊に近づきたいと仰ったように。従僕として護り、お力添えするのみでなく、この魂全てを以って貴女様を包み込みたい。貴女様の心が居られる場所そのものとなりたい。それは貴女様の居ない千年の命よりもずっと僕にとって価値のあることです」
　抱き締めるミカエラ様の早鐘のような鼓動が胸に伝わってくる。きっと僕のそれも同様にミカエラ様に伝わっているのだろう。酷くもどかしく切なさすら覚える、肉体という壁を隔てた曖昧な接触。けれども、あらゆる感覚を共有し総てを完全に通じ合わせる幸せは知っていても、こうやってそれぞれの肌で、手探りで互いを感じ合える歓びを知る精霊など、僕と同じように人に恋をした三属性精霊の他にはきっと居ない。
　僕の腕の中の固く強張っていたミカエラ様の肩から、少しだけ力が抜けるのを感じた。

「……どう考えたって私ってそんな、たいしたものじゃないと思うんだけどな」
何を仰るかと緊張していた僕に零されたのは、心から不思議がっているかのような声だった。しかも、僕を唖然とすらさせる内容であった。
「どこがたいしたものではないのかご説明頂きたい位です。論破する自信はありますよ」
「口でお前に勝てる気はしないからやだ。……ま、夏は涼しくていいかもな」
達観したような、或いは何らかの覚悟を決められたようなミカエラ様の附言に僕は、え？　と首を傾げる。ああ、そういえば、体温がまた知らずのうちにうっかり下がってしまっていたかも知れない。……いや、そうではなく。もしや、今のお言葉は……
「それは御寝所へのお誘いでしょうか」
返答次第ではちょっと自制が効かないくらい下がりそうなのですが。
「ばっ！？　違うっ！　こ、こうしてるくらいなら丁度いいって話であってっ！」
何か危機感でも感じられたのか、にわかにじたばたとし始めた我が主を、僕は獲物を捕らえるかの如く強く抱き締める。そうすればうろたえ具合はより一層強まるが、僕は離さなかった。我が主は暴れるばかりで何も言われませんでしたので。ご友人も仰っていたではないですか。嫌なら一言、命令すればよいのです。
――感謝します。この御方と引き合わせてくれた世界の偶然に。
「愛しています、ミカエラ様。……僕だけの主」
祈りにも等しい思いを込めて、僕は誰よりも愛しき方に、そう囁いた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5749s/

召喚術士の失敗

2011年4月21日21時55分発行